

せし筈を採てこれを石灰壇にて焼て奉りしは、清涼殿にて御酒宴の日なるよしも同書にみえ
また吳竹を以て、木燧及び杵箕等の臺の足に作りし事は延喜式にみえ、人多く庭院に植おきて
杖となし、或は格子の樋子となすよしは、和漢三才圖會にみえたり、今江都にては此竹を以て火
に炙り、瀝を去て曝し竹となし、作簾家の用にそなへ、或は若竹を探て釣竿となし、其枝は別に縛
束して、若竹をその柄とし、以て掃箒とす、其使用多きなり、扱日本紀略に天下の吳竹悉く枯ると
いひしは、此竹のみ枯て、その餘の竹は枯る事なき意なれば、本草辨疑に、寛文六年より本朝の竹
悉く枯て、皆根を斷つ、淡竹の外はかれずといへるに、その意全く同じければ、いよ／＼古に吳竹
と稱するものは、即淡竹の類なる事、これにても押はかるべし。

〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀中

時刻悠紀主基共發自齋場詣大嘗宮○註其行列也○申次木燧一荷、納白管二合、
吳竹爲臺、

〔日本紀略嵯峨〕弘仁四年、此歲天下吳竹實如麥、其後枯盡、

〔古今和歌集雜十八〕題玄らず

よにふれば言の葉の玄げき吳竹のうきふしごとに鶯ぞなく

〔扶桑略記朱雀二十五〕延長九年○承平是歲吳竹枯失、

〔後撰和歌集二十〕東宮の御前にくれ竹うへさせ給けるに

君が爲うつしてうるくれ竹にちよもこもれる心ちこそそれ

きよたゞ

〔古事談一王道后宮〕一條院御時、臨時祭試樂實方中將依遲參不賜插頭花逐加舞之間、進寄竹臺許折
吳竹枝插之、優美之由滿座感歎、依之試樂插頭、永用吳竹枝云云、

〔枕草子七〕五月ばかりに、月もなくいとくらき夜、女房やさぶらひ給ふと、こゑぐしていへば出
て見よ、れいならずいふは誰ぞと、おほせらるれば、いで、こはたそをどろく、玄ふきはやかな